

# 令和元年産水稻の生育状況と今後の対策 (水稻生育診断技術確立調査－5号)

農林総合研究センター  
令和元年6月24日調査

## 気象経過

< 平年対比 >

### 【平均気温】

- ・ 6月第3半旬は、金沢は高く、輪島は並（平年差：金沢+0.5℃、輪島+0.4℃）
- ・ 6月第4半旬は、金沢は低く、輪島はかなり低い（平年差：金沢-1.0℃、輪島-1.3℃）

### 【日照時間】

- ・ 6月第3半旬は、金沢、輪島ともにかなり多い（平年比：金沢 149%、輪島 142%）
- ・ 6月第4半旬は、金沢はかなり多く、輪島は並（平年比：金沢 143%、輪島 103%）

### 【降水量】

- ・ 6月第3半旬は、金沢は少なく、輪島はかなり少ない（平年比：金沢 61%、輪島 47%）
- ・ 6月第4半旬は、金沢はかなり少なく、輪島はかなり多い（平年比：金沢 47%、輪島 189%）

### 【1ヶ月予報】

6月20日発表の1か月予報（6月21日～7月21日）では、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。

## 生育概況等

### 【本田の生育】

#### 1. 出穂期（早生品種）

生育観測田における早生品種ゆめみづほで幼穂が確認されている（0.4～4mm程度）。

ゆめみづほの出穂期は加賀地域で7月17日頃と近年より2日程度早く、前年並、能登地域（羽咋～中能登）では7月20日頃と近年より2～3日早く、前年並である。

また、能登地域（奥能登～珠洲）の能登ひかりの出穂期は、平年及び前年並の7月24日頃と思われる。

#### 2. 草丈

ゆめみづほは近年比106%（加賀地域105%、能登地域108%）とやや長い。

コシヒカリは平年比102%（加賀地域100%、能登地域104%）と平年並。

ひやくまん穀は前年比117%（加賀地域119%、能登地域116%）と長い。

#### 3. m<sup>2</sup>当たり茎数

早生は茎数の増加が緩やかとなっており、前年並に最高分けつ期を迎えると予想される。

ゆめみづほは、近年比113%（加賀地域116%、能登地域113%）と近年及び前年よりやや多い。

コシヒカリは、平年比105%（加賀地域102%、能登地域108%）と平年並で前年よりやや多い。

ひやくまん穀は近年比132%（加賀地域109%、能登地域168%）と、加賀地域で近年並で前年より多く、能登地域で近年及び前年より多い。

コシヒカリ	県平均	553本	(平年比 105%	前年比 110%)	30.7 本/株
	加賀	550本	(平年比 102%	前年比 111%)	30.2 本/株
	能登	558本	(平年比 108%	前年比 109%)	31.7 本/株
ゆめみづほ	県平均	640本	(近年比 113%	前年比 117%)	35.9 本/株
	加賀	678本	(近年比 116%	前年比 120%)	37.9 本/株
	能登	565本	(近年比 106%	前年比 109%)	32.0 本/株
ひやくまん穀	県平均	520本	(近年比 132%	前年比 126%)	26.5 本/株
	加賀	528本	(近年比 109%	前年比 120%)	27.5 本/株
	能登	513本	(近年比 168%	前年比 134%)	25.6 本/株

#### 4. 葉齢

コシヒカリは県平均+0.3葉（加賀+0.4葉、能登+0.3葉）となっており、葉齢展開からみた生育の遅速は、平年に比べて2日程度早いと見込まれる。

ひやくまん穀は県平均+0.8葉（加賀+0.2葉、能登+1.5葉）となっており、葉齢展開からみた生育の遅速は、加賀地域では前年より1～2日程度早く、能登地域では11日程度早いと見込まれる。

#### 【病害虫の発生状況】

いもち病の発生は確認されていないが、発生は平年並と予想されている。

斑点米カメムシ類の発生は多と予想されている。

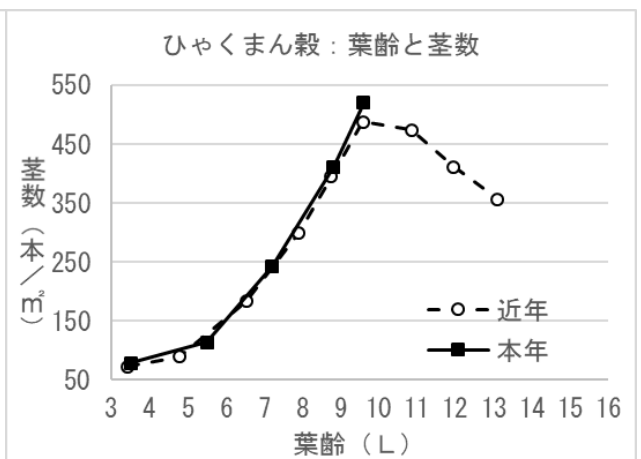
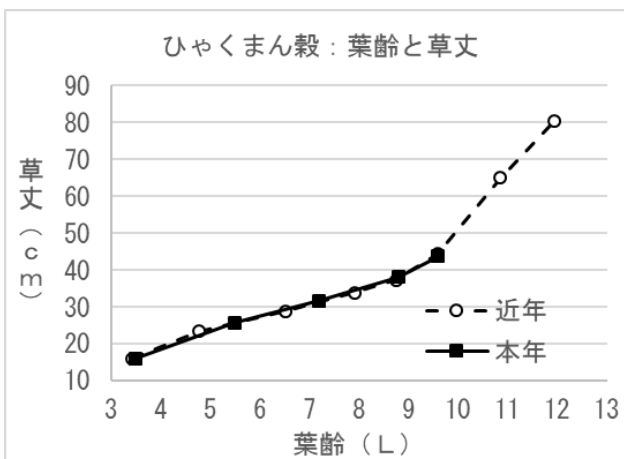
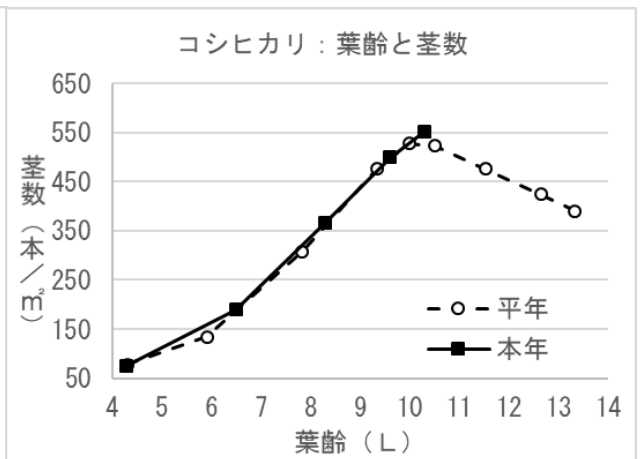
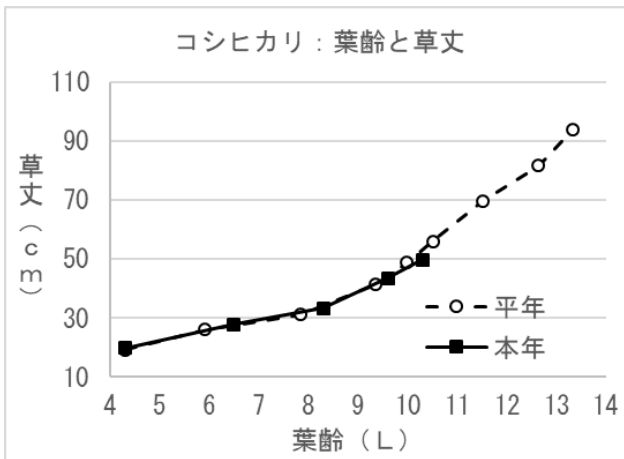
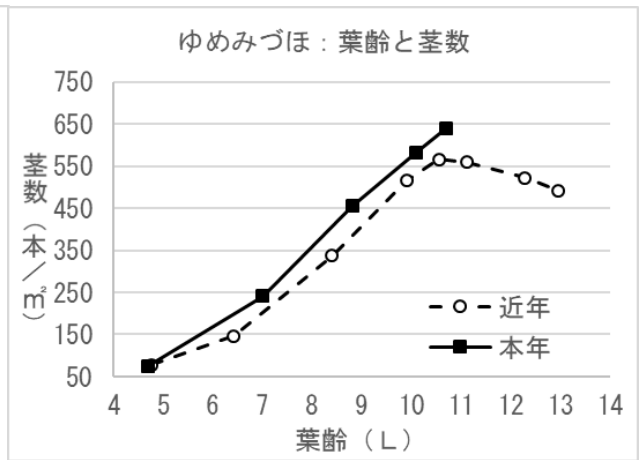
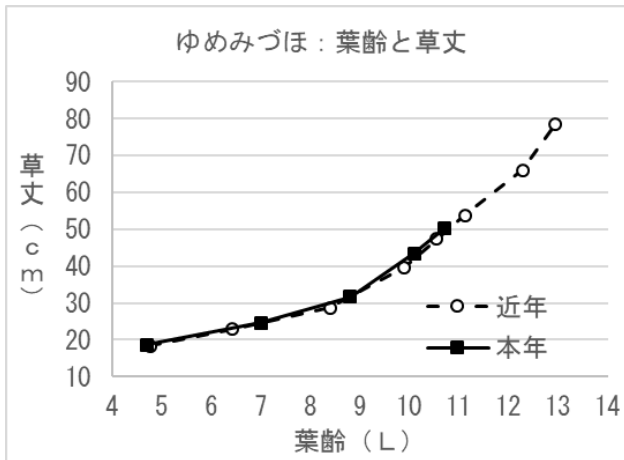
[病害虫発生病害虫発生予報第3号（令和元年6月13日付）参照]

#### 当面の対策

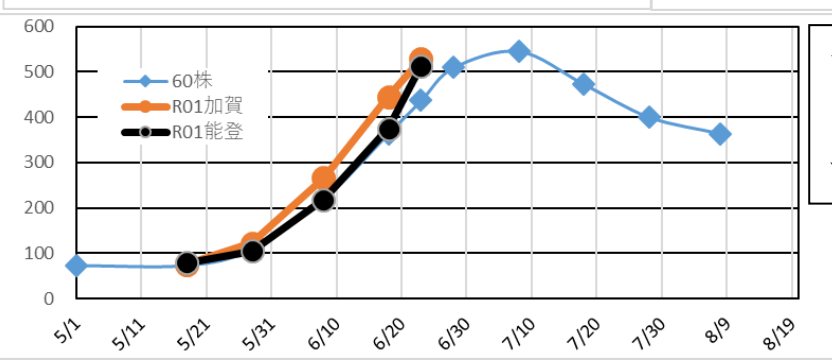
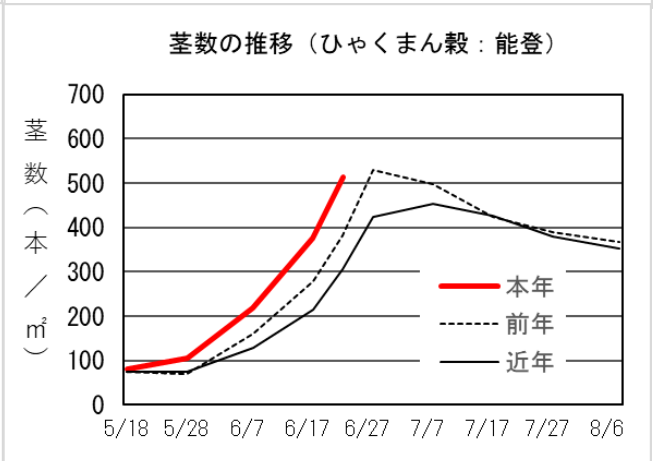
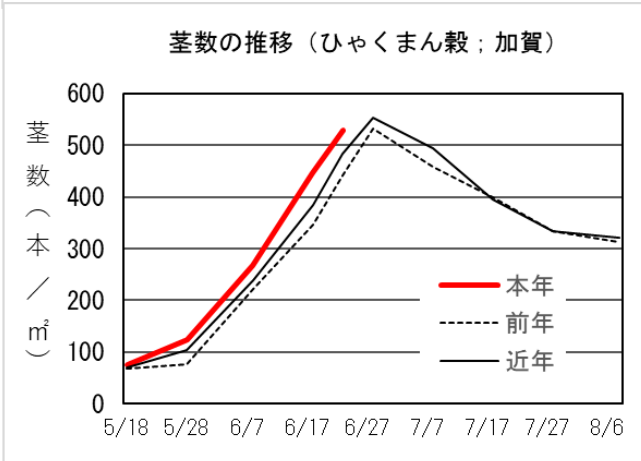
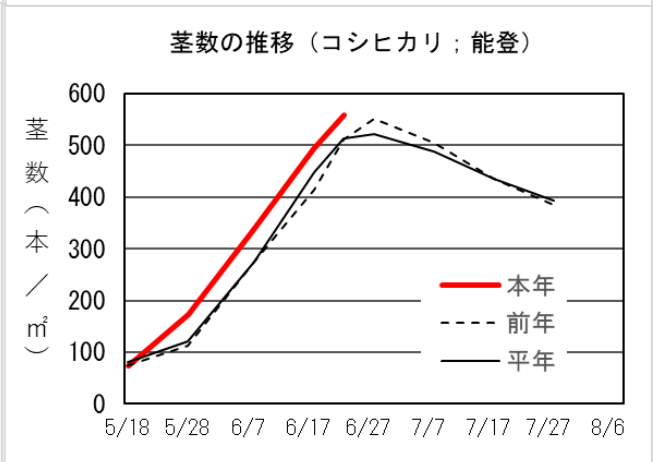
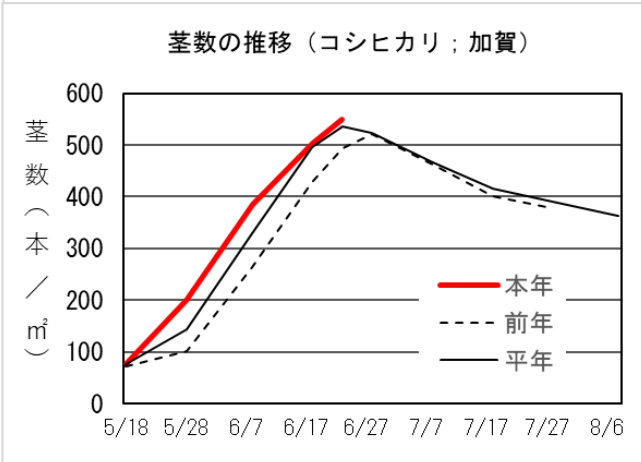
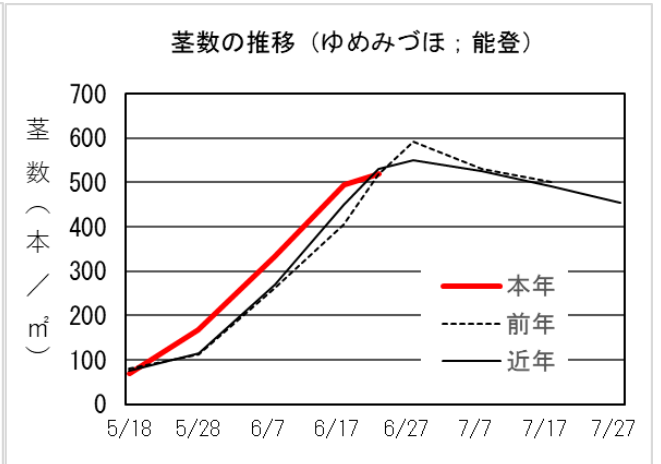
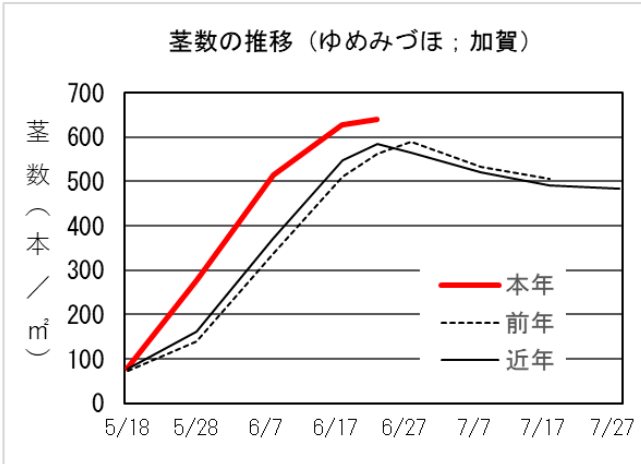
1. 早生は中干しを終了し、以後、間断通水による飽水管理とし、根の機能低下防止に努める。
3. **コシヒカリ、ひやくまん穀**については、稲体の健全化、弱勢分けつの発生抑制と有効茎歩合の向上を図るため幼穂形成期まで**中干しを継続し**、特に、分施肥系のは場では、中干しを確実にいき、穂肥を施用できる稲体へ誘導する。  
コシヒカリ：7月5日頃まで中干しを継続する  
ひやくまん穀：7月15日頃まで中干しを継続する
3. 幼穂形成期（出穂前25～15日）に18℃未満の最低気温が予想される場合は、水深10cm以上の深水管理とし、不稔粒の発生防止に努める。  
○早生品種の耐冷性：五百万石（弱）、ゆめみづほ（中）、能登ひかり（中）、ほほほの穂（中）、石川門（強）
4. 早生の1回目の穂肥は、適期の幼穂長（ゆめみづほ：1～2mm出穂23日前、能登ひかり：2～3mm出穂20日前）を確認し、遅れずに施用する。ただし、茎数が多く、葉色が濃いほ場（葉色板4.0を超えるほ場）では、1回目の穂肥を減量して施用し、2回目は出穂7～10日前に基準量を施用する。
5. 稲体の健全化を図るため、ケイ酸質資材が未施用を直ちに施用する。
6. いもち病の発生はまだ確認されていないが、一旦発生すると急進展する恐れがある。箱施肥による防除を行っていないほ場、常発地および葉色の濃いほ場の巡回を行ない、葉いもちの早期発見に努め、発生を認めたら直ちに防除を行う。
7. 紋枯病については、前年発生した圃場、茎数の多いほ場では多発する可能性があるため防除を実施する。薬剤によって散布適期が異なるので、使用薬剤の基準に従う。
8. 白葉枯病については、過去に多発した地域で箱施肥による防除を行っていない圃場で予防剤の散布を6月30日までに実施する。
9. 斑点米カメムシ類の生息密度を下げるため、引き続き7月上旬まで畦畔や農道の除草を徹底する。除草は、集落など地域全体で一斉に実施すると密度低下の効果が高い。なお、刈り払った雑草は用排水路に入らないように注意する。

<参考：草丈の伸長および茎数の増加傾向>

- ・葉齢を基に草丈の伸長および茎数の増加を平年と比較すると、ゆめみづほ、コシヒカリ、ひやくまん穀のいずれも草丈は葉齢展開に見合った伸長となっているが、茎数は葉齢展開より多くなっている。

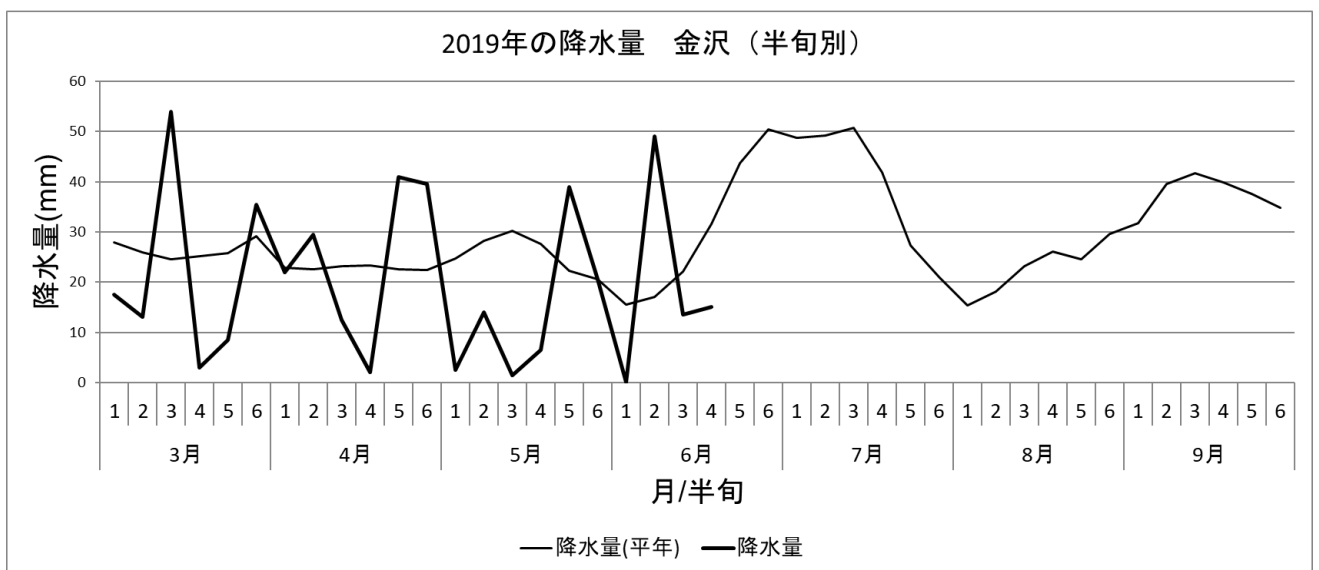
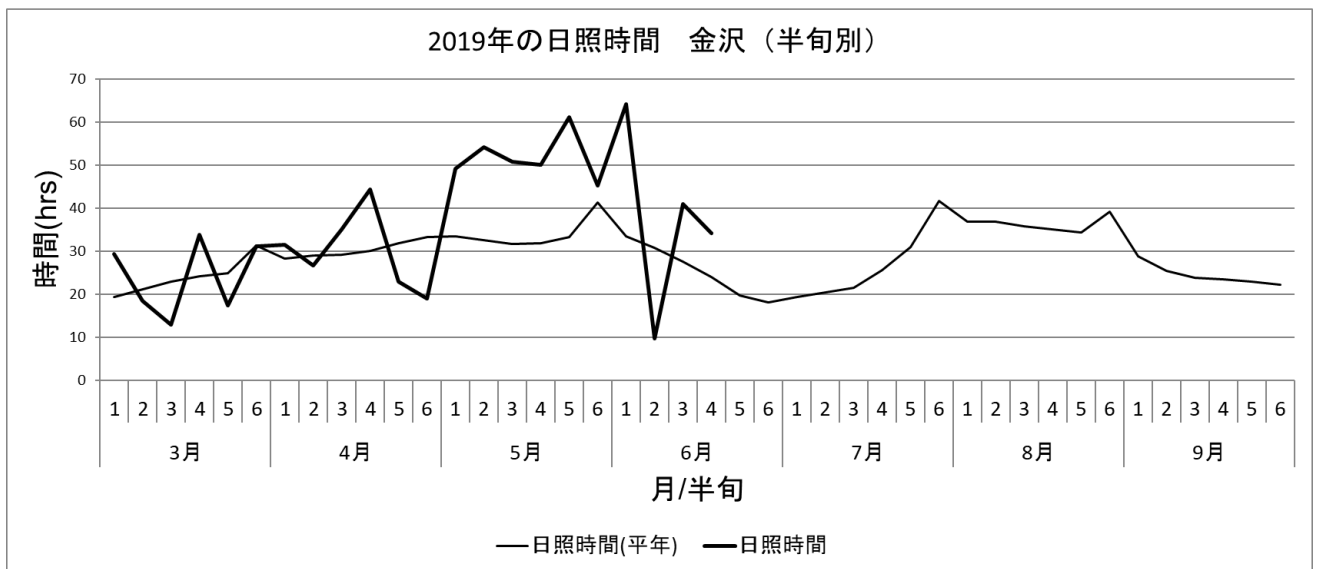
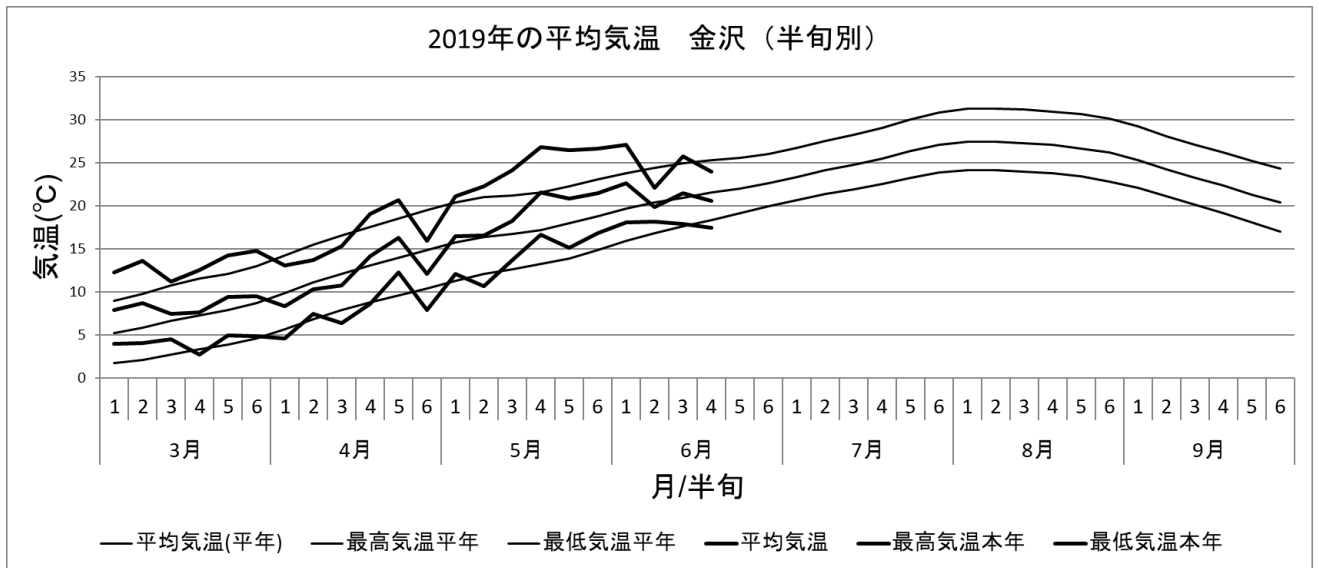


- また、調査日を基にゆめみづほ、コシヒカリ、ひやくまん穀の茎数増加を平年（近年）及び前年と比較すると、いずれも平年（近年）および前年より多くなっている。また、最高分げつ期については、平年よりやや遅く前年並になると見込まれる。



ひやくまん穀の理想生育相  
（60株/3.3㎡の場合）に対する茎数の推移

# 気象経過イメージ（金沢気象台）



# 気象経過イメージ（金沢気象台）

